

日本声楽発声学会

学会通信 第43号

2020年3月発行

■ 会長挨拶

川上 勝功

学会が新しく出発してから、早くも10ヶ月近くが過ぎようとしております。『令和維新』を掲げたにも拘らず、あれよあれよと時間が過ぎ行きていくようですが、本学会においては粛々と声楽発声研究を深める準備が整いつつあります。

先ず各理事の声楽発声における基礎知識確認の『勉強会』を3月15日(月)に行います。第1回目には、基礎中の基礎といえる〔発声の原理〕(発声の仕組み)を取り上げます。ディスカッションを重ねる中でお互いの共通認識を高めて行くつもりです。

また、今年の夏季研修会の折には、音響物理学者をお招きして『聞く人の心に感動をもたらす』といわれるハイパーソニック〔超高周波〕(高次倍音)について講演していただく予定です。この研修内容は声楽発声にとって重要であると私は考えており、共に勉強を進めていくことで、これまでの声楽発声の訓練方法が大きく進展していくものと思っています。正にイノベーション時代に即した研究を進めて行きたいと考えております。

ところで、会員の皆様、唐突で恐縮ですが、お願いがございます。どうぞ、“お一人がお一人”を勧誘する気持ちで、会員を増やしていただけると非常に有難いと思います。本学会は数年前より会の運営資金が欠乏し、毎年ギリギリの予算で動いております。そこで、日本声楽発声学会が皆さまと共に声楽発声研究を継続的に深めて参るため、皆さまのお力で会員を倍増していただきたいと願っております。

勝手なお願いとなりますが、どうぞ宜しくお願い申し上げます

■ 会長推薦 新理事紹介 (五十音順)

執筆者：各理事

氏名：小森 輝彦 (こもり てるひこ)

声楽家 東京音楽大学教授

◇ 自己紹介 (略歴) と抱負

この度、ご推挙頂き、当学会の理事に就任致しました小森輝彦です。甚だ微力ながら学会の発展のために最善を尽くして努力して参りたいと思っております。会員の皆様には、ご指導ご教導のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

学生の頃から音楽、舞台の日常性を求めてドイツでの専属歌手生活に憧れており、東京で勉強したあとにドイツ、ベルリンに4年間留学し、その後アルテンブルク・ゲラ市立歌劇場で12年間の専属歌手生活を送りました。108回例会にお招き頂いた時にお話した「洋の東西のメンタリティーギャップ」というテーマは、半ばライフワークとして、常に私の研究、探求の傍らにあります。東洋人として西洋文化を見つめ、実践する上で、民族性に着目しました。その上で、民族性を超えた人間性や本能へと、更に認識を進めたいと思っております。人間の本能、本性と発声技術、発音技術、音楽性との関係を可能な限り解き明かしていきたいと考えています。私は東京芸術大学、大学院、文化庁オペラ研修所で中山悌一先生、原田茂生先生、勝部太先生に薫陶を受けた後、イタリアオペラ・コーチのウバルド・ガルディーニ氏、コレペティトアでありヴォイストレーナーのデヴィッド・ハーパー氏に師事する機会を得ました。ガルディーニ先生の、自国の芸術をあくまで分析的、徹底的に突き詰めた、イタリアオペラやイタリアの「言葉」への態度にまず深い感銘を受けました。それとは逆にハーパー氏は、ヨーロッパ文化を外側から比較文化論的に捉えており、そこに音声学的な要素をふんだんに取り入れたメソッド展開

ができるのは、ニュージーランド出身で、我々日本人と同じく大陸出身でない事の強みでもあるかと思います。ベルリンで指導を受けたディートリッヒ・フィッシャー＝ディースカウ氏もメンターの一人ですが、指導そのものよりも演奏から強い影響を受けました。意識的な言葉、とりわけ子音の扱いにおいて、ディースカウ氏は別次元の存在だったと思います。これらの経験が融合し、言葉と声が助け合う関係にある「歌唱発音」という概念にたどり着きました。前述の民族性への認識をベースに、さらに分析的姿勢を保ちつつ、尚且つ本能的な衝動も大切にしたい。言語や認識の左脳的、意志的な営みと融合させて、声を自由に羽ばたかせる道を見つけたいです。

氏名：三枝 英人(さいぐさ ひでと)

東京女子医科大学附属八千代医療センター耳鼻咽喉科・小児耳鼻咽喉科科長・准教授 東京藝術大学音楽科言語藝術講座音声学担当非常勤講師

◇ 略歴

1988年 第19回 YAMANO Big Band Jazz contest 優秀ソリスト賞・特別賞受賞、1992年日本医科大学卒業、2004年 日本医科大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講師、2009年東京藝術大学音楽科言語藝術学講座非常勤講師(音声学担当)、2014年東京女子医科大学附属八千代医療センター耳鼻咽喉科・小児耳鼻咽喉科科長・講師、2019年 同准教授

◇ 自己紹介と抱負

東京藝術大学音楽科で音声学を担当させて頂き、丁度10年になりました。受講する学生は声楽科だけではなく、器楽科、邦楽科、楽理科、映像学科など様々ですので、歌唱や発声についてのみではなく、吹奏を含めた器楽演奏を行う「音楽をする私」を如何に理解するかを主眼にして行っています。具体的には、ヒトの身体の由来を解き明かし、一つ一つの器官のヒトにおける特殊性を見詰め直し、藝術を創造し、音楽を行うという他の動物たちが決して行っていない、今あるヒトの姿を知ろうというものです。ですので、この講義を通じて、音楽が上手くなる訳ではありません。そ

の目的は、学生時代のような若いときの勢いのままではなく、将来、困った時や壁にぶつかった時に、もしくは指導者が代わって演奏技法が変わったために本来の自分を見失ってしまった時などに、ただひたすらに闇雲に誤ったまま練習をし続け、結局は声帯や身体の調子を壊してしまったということがないように、身体の成り立ちを理解し、自身に起こってくる身体の年齢変化も知りながら、一生音楽を続け、藝術を深めていくことが出来るようにということです。これは「ヒトとは何か」という私の医学研究テーマの延長でもあります。発声声楽学会においても、発声の由来、更には声楽の由来、究極的には音楽の由来とは何かを見詰めながら勉強させて頂きたいと思っております。宜しくお願い申し上げます。

氏名：菅 英三子(すが えみこ)

声楽家 東京藝術大学教授

◇ 略歴

京都市立芸術大学を卒業後、ウィーン国立音楽大学に留学、首席でディプロムを取得して修了。アルフレード・クラウス国際声楽コンクール第二位、ウィーン国際新進オペラ歌手コンクール第一位、フランシスコ・ビニャス国際声楽コンクールコロラトゥーラソプラノ賞、藤沢オペラコンクール第一位及び福永陽一郎賞、オーストリア共和国学術褒賞、出光音楽賞、青山音楽賞、新日鉄音楽賞、文化庁芸術祭新人賞、宮城県芸術選奨、宮城県文化の日教育文化功労者表彰などを受賞。これまでオーストリア、ドイツ、スペイン、チェコ、アメリカ、日本の各地において歌劇場や市民オペラ、音楽祭のオペラ公演に出演。またボストンシンフォニーオーケストラ、ヘッセン放送交響楽団、NHK交響楽団、日本フィルハーモニー、読売日本交響楽団、東京交響楽団、新日本フィルハーモニー、大阪フィルハーモニー、京都市交響楽団、アンサンブル金沢、仙台フィルハーモニーなど、数多くのオーケストラの演奏会にソリストとして出演する他、リサイタルなどの演奏活動を行っている。

◇ 抱負

昨年より、日本声楽発声学会のお仲間に加えていただきました。以前は学会の例会で東京藝術大学を使われる場合にお手伝いをさせていただいておりましたが、これからは会員として参加させていただくこととなります。まだまだ足りないことの多い未熟者ですが、先輩諸氏の先生方、会員の皆さま方のご指導を仰ぎながら学ばせていただきたいと願っております。どうぞよろしく願い申し上げます。

氏名：田中 昌司 (たなか しょうじ)

上智大学・理工学部・情報理工学科・教授

◇ 略歴

名古屋大学と大学院で電気電子工学を専攻し、プラズマ物理学で博士号を取得。卒業後、当時の科学技術庁の日本原子力研究所に特別研究生（ポスドク）として1年間在籍。その後上智大学の教員として理工学部・電気電子工学科の講師、助教授、教授を務める。その間、アメリカのイェール大学医学部の客員研究員、コロンビア大学医学部の客員教授を兼任した。理工学部再編によって、現在は情報理工学科・教授であり、音楽脳科学の研究室を主宰している。

◇ 自己紹介と抱負

大学生になって宇宙の99%以上はプラズマであることを知り、当時の科学ロマンのひとつだったプラズマ物理学を学び博士号を取得しました。その後もう一つの宇宙である脳にあこがれて脳科学の道を歩むことになりました。はじめは脳のはたらきそのものに興味を抱いて研究していましたが、現在はその脳が創り出す総合芸術であるオペラの世界に現代脳科学の最先端の研究テーマを見出し、あこがれと探求心によって新たなフロンティアの開拓をしたいと心底思うようになりました。

そんな矢先、昨年の5月例会での特別講演のご依頼をいただき、その一端をご紹介させていただく機会をいただきました。さらに理事として学会運営に携わることができる機会もいただき、とて

も感謝しています。微力ながら学会の発展のためにお役に立てれば幸いです。

これまでに多くの音楽家・音大生の皆様に協力していただいて実験を行ってきました。おかげさまで、音楽家の脳の特徴を明らかにすることができました。また、イメージ演奏実験という手法も導入しました。

現在は、主に声楽家の方々の演奏中の脳活動を調べています。これまで技術的に難しかったので、ほとんど研究されていません。とくに声楽は本当に少ないです。しかし声楽ほど豊かな感情表現ができる音楽は他にないので、脳科学的にも大変興味深いです。手本がないため手探りの状態ですが、オペラを脳科学で語ることを実現できる日を夢見ています。

氏名：森井 佳子 (もりい よしこ)

国際コーディネーター 声楽家

◇ 略歴

活水女子大学文学部英文学科、活水女子大学音楽学部演奏学科声楽コース卒業。声楽を中原（木口）里花、神崎雅一、山田実の各氏に師事。Barbara Schlick 氏のバロック声楽マスタークラスをドイツのブッパータル及び聖グレゴリオの家で受講。Marvin Keenze 氏のレッスンを東京で受講。合唱を大谷研二氏に師事。大学在学中はオペラ『フィガロの結婚』スザンナ役、『ヘンゼルとグレーテル』露の精役を務める。バッハのマタイ受難曲（日本語版）のアルト・ソリスト、マルティン・ルター宗教改革500年記念演奏会にてバッハのカンタータ BWV 80 のアルト・ソリストを務める。2013年オーストラリアのブリスベーンで開催された第8回国際声楽指導者会議に日本代表代理として参加、2017年スウェーデンのストックホルムで行われた第9回国際声楽指導者会議（通称 ICVT）に日本代表として参加。長崎県立学校教諭、横浜市立学校教諭を経て国際コーディネーター、声楽家、日本声楽発声学会理事、日本音声言語医学会会員。出版、著作物：『声楽発声研究』第9号 研究動向「海外研修報告 第9回 ICVT 2017 参加報告」

◇ 自己紹介と抱負

教員の経験を通じて、正しい声楽発声に関する知識を学び、その知識を更新していく必要性を感じてきました。最近二回の国際声楽指導者会議に参加し、そこで得たことを会員の皆様と共有し広く教育現場に還元していきたいと考えていたところ、川上会長よりご推薦をいただき理事を務めることになりました。国際声楽指導者会議(ICVT)に創立時から関わり、国際学会での研究発表を行い諸外国の声楽指導者や研究者と交流してきた本学会顧問の山田実先生を始め、諸先輩方が築いてこられた本学会の国際交流の灯を引き継ぐべく活動していく所存です。最新の医学や科学の知識によって解明されていく発声の神秘に触れられるのは、本学会の会員として得られる大きなメリットです。会員の皆様とともに声楽発声の研究に邁進し精進していきたいと存じます。何卒よろしくお願い申し上げます。

■ 2019年11月例会報告

◇ 研究発表

1. 山田 実

声楽家 桜美林大学名誉教授 学芸博士

テーマ：吸気発声の効用

概要：声楽教師は、生徒の出す声のみでその良否を判断しなければならない。声帯の本来の機能は嚥下時の気管の保護である。ヒトは睡眠時も唾液を無意識に嚥下し、声帯は収縮のみを繰り返している。それに反し、歌唱時は声帯を伸展しなければならず、その為の意識的な訓練が必要となる。九州大学医学部で小宮山教授監修下、鼻腔から声門下までセンサーを挿入し、ピッチの変化と音圧、呼気圧、呼気流率、声門下圧が平行している事を確認。また、東京大学医学部で廣瀬教授の監修により、声帯筋、外側輪状披裂筋、輪状甲状筋、胸骨甲状筋それぞれの筋電図を作成。音圧の変化には声帯筋の反応が著しく、外側輪状披裂筋の反応は僅か。また、呼気発声から吸気発声への移行に関しても同様の反応が見られたが、輪状甲状筋、及び胸骨甲状筋には、全く変化が見られなかった。

そして東京ボイスセンターの渡邊教授により、母音/a/によるオクターヴ、F3~F4の動画を撮影。話声位では喉頭蓋が倒れていて声門の観察が不可能。歌声位では、呼気、吸気発声の両者とも、声帯が伸展する声門運動が同一である事を確認した。これらの結果から、歌唱時の声門運動に必要な筋肉努力は、吸気発声によって、より明確になる事が実証された。吸気発声により、声帯を薄く伸展させ、高音のピアノシモ、アジリタ、チャックリングなど、高度なテクニックの習得が可能となる。

2. 林 いのり

声楽家 お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科博士後期課程1年

テーマ：G. ヴェルディの歌劇における「朗唱」の記譜 - 歌劇『シモン・ボッカネグラ』(1881)プロローグの研究 -

概要：G. ヴェルディが活躍した19世紀半ば~20世紀初頭は、舞台装置や脚本の詩行形態等、オペラの現場と関わる分野の変化と共に、歌唱法においても変化が起こった時代である。本発表の『シモン・ボッカネグラ』(1881)の一部を楽曲分析し、初演を務めたV. モレルの演奏に関する記録と照らし合わせる事で、その演奏作法とヴェルディの音楽との関係について考察した。発表ではまず、ヴェルディ作品の朗唱に見られる旋律線と演劇表現の組み合わせを例示し旋律線やオーケストラの様相と劇的表現に複数の組合せがみられる事を指摘した。次にモレルの演奏活動の記録から、台詞の「発音」や「言い回し」がヴェルディに評価されていた事を確認した。その上で、彼の歌唱が予定されていたプロローグの旋律を提示し、多用されていた単一音の反復を基調とした旋律線に、その「言い回し」「発音」の技能を活かす機能が想定されたのではないかと結論づけた。質疑ではヴェルディの器楽奏法と歌唱法の指示の関連性についての質問を頂いた。時間配分の問題で説明不足の箇所が生じた事は反省点である。

林 いのり記

3. 豊田 喜代美

声楽家 東京大学「芸術創造研究連携機構」
非常勤講師 博士 (知識科学)

テーマ：貴志康一 (1909-1937) 作曲オーケストラ
歌曲作品について

概要：邦人作曲のオーケストラ歌曲は多くない中で、貴志康一は自作の詩による歌曲 (及び交響曲) をベルリンフィル他ドイツのオーケストラを指揮して発表し当地で非常に高い評価を得た。今回、1987年東京都交響楽団「日本人の作曲家シリーズ」第1回貴志康一作品演奏会ライブの音源聴取と共に発表した。オーケストラ演奏の際の多彩な音響と歌詞の言葉によって作品の暗黙的な意味は、聴取者の個々の記憶に繊細に触れる可能性がある。自身が体験して感じ取った日本固有の豊かな『自然』『文化』が自作の詩となって、情感が直結的に音響に表れており、そこには詩と曲の一体感の極みが認識される。演奏の際には、その直結ゆえの爆発的な表現の醍醐味が歌唱表現される (豊田の演奏体験より)。貴志康一は日本固有の『自然』『文化』が育んだ日本人の『情感』を西洋クラシック音楽作曲技法を駆使して西洋人の心に寄り添うように作曲し、その『情感』を彼らに感じ取ってもらうことを日本歌曲作曲の指針とした可能性がある。貴志康一の生き様は、日本人として西洋音楽に携わる際、道標になる素晴らしい事例である。貴志康一は28歳でこの世を去るまでに、多くの作品を遺しており、芦屋市の甲南学園内にある『貴志康一記念室』には貴志康一の全資料が収められ、閲覧が可能である。貴志康一は『大衆芸術』という言葉を書き、「日本において、ウィーンのような音楽都市創成ができないだろうか」と記述している。生命の躍動に溢れる貴志康一の歌曲は魅力的である。貴志康一を知る人は参加者の中に非常に少なかった。今後、更に広くお知らせする必要性を認識した。 豊田喜代美 記

◇ 特別講演

講師：夏山 美加恵 (古楽歌手)

演題：中世典礼音楽の声楽アンサンブルについて

略歴

エリザベト音楽大学宗教音楽科卒業。専攻科修了。デン・ハーグ王立音楽院古楽科古楽声楽コース入学。2001年同校修士課程修了。第6回山梨古楽コンクール第三位入賞。ヴォーカルアンサンブル・カペラ所属。フォンスフローリス古楽院講師。

内容

『中世ヨーロッパの修道院や教会で歌われていたグレゴリオ聖歌などの典礼音楽の演奏において、先唱者としてソロを歌うのは能力の優れた歌手ではあるが、彼らは決してその歌声を披露したというのではなく、声で周りの歌手たちを導くという考え方であった。Cantor (先唱者) の肩書のある人たちは口伝伝承という方法で歌い方を教えた。修道院における共同生活は生活習慣や考え方でなく、祈りの中で呼吸や声の響きを統一していった、と考えられる。本講演ではグレゴリオ聖歌や中世の時代の素朴なポリフォニーを歌う。その際に、『よく聴く』事を通して、その歌詞、旋律、音程の感覚、響き等を身体で感じ取り、呼吸や声にどのような影響が現れるかということを経験していただくことを目指す。また、当時の写本と現代譜を見比べてみる。当時使用されていた歴史的な記譜法による楽譜を歌うことで、時代を超えて当時の人々と同じ視点に立ち、その音楽をさらに実感できると考えている。このような方法で歌唱法を追求することは現代の声楽や合唱の歌唱のありかたにも大いにつながると考えている。夏山美加恵 記』

以上、夏山氏は、グレゴリオ聖歌を実際に参加者に指導しながら、個々にその響きを体感することによる「理解」を目指してワークショップを行いました。夏山氏の指揮と歌唱指導によって、聴き合うことに注目しつつ、夏山氏の用意した曲を参加者全員で、ユニゾン及び輪唱の歌唱を行いました。個々人の響きが共鳴し合っただけでなく、一つの豊かな響きになっていくのを歌いながら、それぞれに体感できたのではないかと思います。時折、夏山氏の要請で川上会長が通奏低音を歌い、深く響く低

音が全体の歌唱を支えました。またグレゴリオ聖歌歌唱体験は、「歌うことは祈り」という、歌唱のある意味での原点を体感する機会となりました。

豊田 記

◇ 現役声楽家の演奏とお話

講師：白木 あい 声楽家（ソプラノ）

ピアノ：森 遥香

テーマ：オーダーメイドの作曲家モーツァルト
略歴

東京芸術大学卒業。同大学院修士課程・博士後期課程修了。音楽博士号取得。安宅賞、松田トシ賞、三菱地所音楽賞受賞。03年日本音楽コンクール第1位、松下賞及び聴衆賞、各省受賞。現在、国立音楽大学・上野学園大学非常勤講師。

演奏曲：W. A. モーツァルト作曲

- ・ソプラノ歌手カタリーナ・カヴァリエーリ嬢へ《劇場支配人》KV486より“若いあなた！”
- ・ソプラノ歌手 アロイージア・ランゲ嬢へ《劇場支配人》KV486より“別れの時の鐘は鳴り”
- ・カストラート歌手 アダモ・ソルツィ氏へ《アルバのアスカーニョ》KV111より“あなたの気高い姿から”
- ・ソプラノ歌手 ナンシー・ストラース嬢へ コンサートアリア KV50 “どうしてあなたを忘れられようか～恐れなくて、愛する人よ”

概要

『声楽家にとって全ての基本ともいえるモーツァルトの作品は、同時に、勉強すればする程、その難しさに悩まされもする。モーツァルトは作曲時には、歌手によって楽譜を変更したり改訂したり、又は歌手に当て書きすることを多く行っていた。そんなモーツァルトのオーダーメイド作品を見ると、その作品を歌った歌手の声質やキャラクター・得意な技巧などを窺い知ることができ、現代に生きる我々にとって大変興味深い資料となる。声楽家にとって最も大切なことは自分の声に合った作品を歌うことである。声を壊さないためにも自分に合う曲とは何なのか、それを常に自問自答する必要がある。モーツァルトのオーダー

メイド作品がどのような声と音楽に対して書かれたものなのかを演奏でご紹介する。白木あい 記』

以上、白木氏はハイソプラノの音域による華麗なコロラチュラが散りばめられた華やかでしっとりした情感に満ちたモーツァルトのアリアを、まるでモーツァルトのキラキラとした魂がこの場にいるように感じられる、魅力的で素晴らしい演奏をくださいました。また近年主演の新国立劇場オペラ「紫苑物語」（西村朗作曲）の際、音楽的には自らの音域を超えた歌唱に、また、演技的には妖艶なシーンに挑戦し、成功なされたお話はスリリングな内容であり、体調管理には、ご家族との信頼が効果的で大きな応援であったお話も貴重でした。

豊田 記

※以上、第110回例会報告です。

※以下、2020年2月10日現在の、第111回例会内容、及び、2020年度夏季研修会内容です。

■ 2020年度5月例会内容

日時：5月31日（日）9時55分～16時20分

場所：東京芸術大学

◇ 研究発表

1. 齊藤 裕 声楽家 鹿児島大学教授

テーマ：「柔軟な構え」に基づく声楽発声訓練方法
-学習者が自立できる声楽発声を目指して-

2. 森井 佳子 声楽家 国際コーディネーター

テーマ：ICVT 国際声楽指導者会議について

◇ 特別講演

『ドイツ歌曲公開レッスン』

講師：小林 道夫

ピアニスト チェンバリスト 指揮者 東京芸術大学客員教授 大阪芸術大学客員教授 大分県立芸術文化短期大学客員教授。

受講生：未定

◇ 現役声楽家の演奏とお話

講師：服部 洋一

声楽家 琉球大学教授 東京芸術大学・東京音楽大学、各非常勤講師

テーマ：あなたの知らないスペインへの誘い
～6つの顔を持つスペイン歌曲の世界

■ 2020年度夏季研修会内容

日時:8月25日(火)、8月26日(水)

場所:盛岡市民文化ホール

所在地:〒020-0045 岩手県盛岡市盛岡駅西通
2丁目9-1 なにな 電話: 019-621-5100

◇ 2020年8月25日(火)

A 講座 音声生理学講座 15時30分~17時30分

講演タイトル: ヒトの歌唱の原型とは何か?

講師:三枝 英人

東京藝術大学音楽科言語芸術講座音声学担当
非常勤講師 東京女子医科大学附属八千代医
療センター耳鼻咽喉科・小児耳鼻咽喉科科長・
准教授

B 講座 歌の集い演奏会 18時30分~20時45分

出演者(五十音順)

- ・岩間 明日香 Sop. 塚本 雅子 Pf.
- ・清水 順子 Sop. 鈴木 恵 Pf.
- ・高木 照子 Sop. 鈴木 恵 Pf.
- ・仲本 博貴 Bar. 内海 博子 Pf.
- ・藤原 優花 Sop. 鈴木 恵 Pf.

☆レクチャー演奏 『池辺晋一郎作品・合唱曲』

講師:佐々木 正利 声楽家 岩手大学名誉教授
指揮者

ゲスト:池辺 晋一郎 作曲家

合唱団:岩手大学合唱団 予定

◇ 2020年8月26日(水)

C 講座 特別講座 10時~12時

講演タイトル;

耳に聞こえない高周波が音楽の感動を高める

講師:本田 学

国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究セ
ンター神経研究所 疾病研究第七部 部長

D 講座 日本の作曲家シリーズⅦ 13時~15時

講師:池辺 晋一郎 作曲家

演奏曲:日本歌曲 池辺 晋一郎作曲

奏者:豊田喜代美 Sop.仲本博貴 Bar.内海博子 Pf.

事務局だより

A4 サイズは文章が横に広がるので2段が読み
やすい、とのアドバイスを頂きました。今後も改
善に努めて参ります。本年度夏季研修会は、杜の
都・盛岡市盛岡駅近くに在る盛岡市民文化ホール
で開催いたします。このホールはパイプオルガン
を擁した重厚なシューボックス型で、コンサート
ホールとして好評を得ております。5月例会と共
に盛岡市民文化ホールでの夏季研修会へのご参
加をお待ちしております。 豊田喜代美

日本声楽発声学会 理事会

会長 川上勝功

副会長 佐々木正利 豊田喜代美/兼事務局長

理事(五十音順)

池田京子 河合孝夫 小森輝彦

齊藤祐 三枝英人 菅英三子

鈴木慎一郎 竹田数章 田中昌司

西浦美佐子 森井佳子

事務局 佐々木徹

E-mail: info@jars-voice.org

Tel / Fax: 03-6804-0626

〒154-0002 東京都世田谷区下馬 3-14-4

日本声楽発声学会 Web サイト

<http://www.jars-voice.org/>

郵便振替口座 00170-0-119920

加入者名:日本声楽発声学会

日本声楽発声学会

2020年度 学会通信

2020年(令和2年)3月15日発行

発行者:日本声楽発声学会

編集者:豊田喜代美

印刷所:よしみ工産株式会社東京事務所

〒113-0033 東京都文京区本郷 3-26-1 本郷宮田ビル 3F